審判論総論

序論

　競技を静的な言い方で表現すると「競技者の運動を制限し決められた方法で優劣を決める」という事となる。　ビーチボールバレーは次の様に定義する事ができる。　相手チームから来たボールをルールで許された行動によって相手コートに返す競技で、ルールで許された行動によって相手コートにボールを返せなくなった場合、相手の得点を加点して決められた得点に到達したことで優劣を決定する競技であるといえる[1]。

　ビーチボールバレーになぜルールが必要で審判員が必要かではなく、ルールと審判員が存在して初めてビーチボールバレーが競技であるということになる。

　ルールとは「競技者の運動を制限し優劣を決める方法」そのものである。　審判員は競技者がルール通りに行動しているか監視し優劣を決める行為に対して判定を下す者である。 更に審判員には競技者の安全と充実を確保し円滑な競技の進行を行う義務がある。 ここで記した充実とは競技者ばかりでなく競技の観戦者に対してもビーチボールバレーに関わり充実感を味わえるという意味である。 すべての行為に対してルールを決める事が可能であれば審判員はルールの判定だけをしていれば良いが、実際はルールがすべての行為を制限することは出来ない。 更にマナーやエチケットなどのようにルールで規定することが難しい。 審判員はルールの基本理念を元に自らの裁量によって最終判断し競技のすべての進行を行う。 重要なことはすべての判定について両対戦相手に公平であるということである。

　最後にビーチボールバレーの審判員は他の競技と異なりプレイヤーが審判員を兼ねるという基本理念がある。 突き詰めて審判員を定義するとこのシステムは公平性の面や質の向上という面から問題がないわけではない。　しかし、ビーチボールバレーは生涯スポーツであり余暇スポーツである道を選んだ。 その為にはプレイヤーが審判員を兼ねるということで特別なボランティアを必要としない競技を目指す事となった。

　一般的に競技を行う者はルールの穴を如何に突き、如何に審判の目をごまかしてまでも勝利を得ようと考えるものである。　オリンピックなどはその最たるものである。

　しかしビーチボールバレーはプレイヤーが審判員を兼ねるとしているのでそのような手段に頼らず正々堂々とした勝負を目指し、複雑なルールや特別な訓練を必要とする専門的な審判員を必要としない競技にしたいものである。

---

[1] この文章を書いた後まったく同じ書き始めの本（６人制バレーボールのルールと審判法　山岸紀郎・下山隆志著　大修館書店）を見つけた。　考え方や纏めかたが我々のそれに近いものがあったので参考とした、またバレーボールの解説書であるのでビーチボールバレーとの違いについても検討材料とした。

ルール

ルールとは「競技者の運動を制限し優劣を決める方法」そのものである。　さらに次に列挙する内容を包含する。

1. 試合進行方法。
2. 競技者および競技会全体の安全の確保。
3. 競技者および競技会全体の品位の確保。

上記は一般的な競技に通ずるものである。 ルールにはもうひとつ重要な側面がある、それは競技そのものの定義であるという事である。 たとえ小さなルール変更でも競技の姿形が変わる事に通じる。　特にルール変更時に注意を払わなければならない事は、ルール変更がその競技自体を異なった競技にしないよう競技の特徴とその定義を充分に理解し作業しなければならない。

競技の特徴とその定義

観る競技ではなく行う競技として万人に向き万人が面白いと思うものは恐らくないだろう。　人々が競技に魅せられる主な要因は、他人と比較して勝った時、自身の向上が実感できた時、ストレス発散できた時のそれぞれの満足感や充実感である。　大きくいえば自己実現できた時である。　万人が自己実現できる競技は万人がそれぞれの特性が異なる限り同じとはならない。 一般的に競技の歴史は自然発生的に出来たものと作るべくして出来たものがある。 ビーチボールバレーは後者に属する。 どちらの競技であっても最初に何らかのルールがあってそれに対して興味を持った者がいて発展していった結果である。 特にメジャーといわれる競技はそれぞれ人間の能力の何を競うかで分化している。 同じような能力を必要とする競技は永い間に吸収淘汰を繰り返し現在のようになったものと思われる。 中にはある競技のサブセットとして簡単にしたところ独自の進化の過程で別の能力を必要としメジャーになった競技もある。　サッカーとラクビー、硬式野球とソフトボール、テニスと卓球等々である。　バレーボールとビーチボールバレーも同じ道を歩んでいる。 競技の特徴を定義する場合に考慮しなければならない事はその競技の発生の背景、愛好者存在の理由そして主に使う身体能力の把握である。　将来的に競技を発展進化していく上で競技の特徴を正しく把握しないでルール改正した場合、競技そのものの本質を変えてしまう事に通じかねない。

ビーチボールバレーの定義

　ビーチボールバレーのルールを考える上で先ず、ビーチボールバレーの定義を明確にしておくことが重要である。　ビーチボールバレー開発当初の定義は次のようなものであった。

1. バレーボールのような競技とする。
2. 運動の苦手な者や高齢者にも早期に簡単に試合が出来ること。
3. 危険の少ないこと。
4. コミュニティスポーツとして老若男女幅広く一緒に楽しむことが出来ること。
5. 何時でもどこでも試合が楽しめること。

　その結果、現在のルールの基本が決められた。　開発当時の基本的事項とその要因を解説する。

1. バレーボール系のニュースポーツ
   大前提である、特別な意味はない。
2. バトミントンコート使用と４人制
   多くの体育館にあり、特別な施設を作らなくて良い。　背の低いものやジャンプの出来ないものでもアタック（攻撃全般を意味する）をすることが出来る。
   ４人制が中高齢者の運動量に適していた。　また比較的集まりやすい人数である。
3. ビーチボール使用
   ボールが当たることによる危険も恐怖感もなく、また力のない者でも扱うことが出来る。　空気抵抗により中高齢者にとって適度なスピードである。
   どのような体制でも片手で簡単に扱うことが出来るので、基本技術がなくてもボールを扱うことが容易である。
4. アンダーハンドサーブの制限
   ９人制バレーボールの安全サーブのイメージで、誰でも簡単に打って、レシーブ可能である。
5. ワンボールの禁止
   ブロック優位でスパイクが不利であると判断し採用した。

　現在では次の様になっている。

1. バレーボール系の競技ではあるがビーチボールバレーという独特な競技である。

2. 愛好者各自の技量に合わせて競技として楽しむことができる。
3. 余暇スポーツとしてコミュニティスポーツとして老若男女幅広く親しまれる競技である。
4. 危険の少ないこと。
5. 何時でもどこでも試合が楽しめること。

現在のルールの基本的事項とその要因を解説する。

1. バレーボール系のスポーツ
   大前提である、特別な意味はない。　独自のジャンルである。
2. バトミントンコート使用と４人制
   多くの体育館にあり、特別な施設を作らなくて良い。　背の低いものやジャンプの出来ないものでもアタック（攻撃全般を意味する）をすることが出来る。
   ブロック、アンダーハンドサーブにて適したネットの高さ。
   ４人制が中高齢者の運動量に適していた。　また比較的集まりやすい人数である。
3. ビーチボール使用
   ボールが当たることによる危険も恐怖感もなく、また力のない者でも扱うことが出来る。　技術に応じてスピードを得ることができる。　初心者にも扱いやすい。
4. アンダーハンドサーブの制限
   スピード感のあるサーブ。　サーブレシーブの対戦が面白い。
5. ワンボールの禁止
   ディフェンスとオフェンスの切り替え時間が適度にありメリハリのあるプレイが可能。　ブロックが使える。

この５点はビーチボールバレーがビーチボールバレーであるための重要な条件である。　さらに詳細に考察してみる。

1. バレーボール系のスポーツ
   主に必要とされる能力は、状況の即断即決と予測能力、反射神経と瞬発力、空中姿勢制御および視認識能力である。
2. バトミントンコート使用と４人制
   ブロック、アンダーハンドサーブにて適したネットの高さ。
   広範囲の年代のプレイヤーに向いたボールのスピードに適した人数とコートの広さ。

3. ビーチボール使用

　ボールが当たることによる危険も恐怖感もなく、また力のない者でも扱うことが出来る。　技術に応じてスピードを得ることができる。　初心者にも扱いやすい。　危険の少ない中でスピード感あるプレイを楽しむことができる。

　ビーチボールバレーがその特性を決定する一番の要因。

4. アンダーハンドサーブの制限

　スピード感はあるが適度にレシーブ可能なサーブでサーブレシーブの対戦が面白い。　空気抵抗による適度な変化もサーブ側にとってもレシーブ側にとっても適度に面白い。　いま以上のスピードやサードサーブによる横の変化はサーブレシーブの優劣のバランスを大きく欠く結果となる。　今後の大きな課題である。

5. ワンボールの禁止

　ディフェンスとオフェンスの切り替え時間が適度にありメリハリのあるプレイが可能。　ブロックが使える。　ディフェンスとオフェンスの切り替え時間が適度にあるということおよびブロックというテクニックを使えるということは競技者間の運動能力による差を緩和し、頭脳プレイが可能となる。　ボールによる危険が少ないのと合わせて中高齢者に向く競技たる所以である。

審判員に必要な技術

審判技術は次に示すように大きく４つの技術に分類できる。

1. 審判心得

審判員の姿勢や態度に関する技術。　“審判員の心構え”として纏めた。

2. ルール理解

ルールを理解する技術。　この技術には競技の向上に伴うルール改正に関する基礎理論理念の理解を含める。　“ルールの解析と検討”として纏めた。

3. 審判技術

ルール理解を踏まえて実際の試合での運用のための技術。　“ビーチボールバレー　ルール解説書”として纏めた。

4. 審判員指導技術

審判員技術を後世に伝える技術。　“審判員指導技術ノート”として纏めた。

審判技術分類

バレーボールの審判技術分類には主審、副審、線審および記録員それぞれに３つの段階がある。

第一段階

ルールを理解し呼笛、シグナル、基本的な位置の取り方などを正確にできる。

第二段階

各プレーの判定基準を確立すること。　イン、アウトの判定、ハンドリング基準、ネット際の判定などである。　判定基準を確立したら競技中の実践である。

第三段階

試合の運営である。　試合前の準備、審判団の協力体制、ゲームの進行である。ゲームの進行の中にはルールにない難題のおきた時の解釈判断を含む。

ビーチボールバレーでは審判技術取得の主目的を“プレイヤーが審判を行う”としているため、それに沿ったＣ級認定、Ｂ級認定、Ａ級認定に分類している。

Ｃ級認定

Ｃ級認定は公式戦において“プレイヤーが審判を行う”を実践できる程度の技術を目的とする。　実情は、入門の窓口を広げるためルールブックを読んだ程度の者に対し講習を行い資格を附与している。 審判員という意識を持って本来の目的に向かって研鑽する段階である。

B級認定

C級認定者に対して指導を行うことを目的とする。　実情は、C級認定の目的である“ プレイヤーが審判を行う ”を実践できる程度の者に対し試験を行い資格を附与している。

A級認定

B級認定者に対して指導を行うことを目的とする。　B級認定における理論武装の到達点と考える。　また、ルール検討委員などになりうる人材のための認定とする。

視認識メカニズムと審判団のチームワーク

視認識メカニズムとは目でものを見るときの目と脳のメカニズムである。

視認識メカニズムについて

目から見た情報(像)はそのまま脳の中で像として見えることはない。 例えば映画は早いスピードで撮影した静止画の集合である。 しかし人間の脳には連続動画として見える。 線にかかるボールを映画で撮影した場合、たとえボールと線が接しているコマがなくともボールが線にかかるように見える。 しかしそれがすべての人間に等しい結果として見えるわけではない。 ボールの回転や軌道、ボールの速さそしてボールが打たれた状況などすべての情報と経験を元に像を作るのである。

ライン上のボールの判定を例にあげる。 同じ、状況を同じ位置から見てもきわどい判定は各々異なることがある。 どれもはっきりラインとボールが見えたとしてしても異なることがある。 その理由は、目に入ってきた光学的な像が脳の中でそのまま見えることはないからである。 ボールの起動やその他の情報と過去の情報すべてが加味されて実像として脳に見えるのである。 ボールが早すぎて見えない場合やボールを見ていなくてジャッジができない場合を除いてもすべての人間が同じ判定をできるわけではない。

特に主審から見てエンドラインと副審側のサイドライン上のボールを正確に判定することは困難である。 主審の位置からエンドラインだけを見ていた場合でも主審からはボールインと見える場合でも線審から見るとアウトに見える場合がある。

特にプレー中、主審の目はボールを追っている、そのような状況下ではライン上のボールやオーバーネットの状況を正確に見えない。 その為に副審や線審とチームワークを組んでより正確なジャッジをできるように心がけるべきである。 観客も含めてお互い、視認識メカニズムを充分に理解して他人の判断を尊重する心の余裕を持たなければならない。 主審は常に状況を判断し一番正確に判断できる位置にいる審判員の判定を尊重する。 しかし主審から見て他の審判が明らかに技術不足または職務怠慢から誤ジャッジしたと判断した場合は、自分の判断を重視するべきである。 必要に応じて注意および交代を要求することもできる。